

Vivid Strike サイヤ人がいたら・・・

凱旋の女神

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

リリカルなのはVividの続編である、Vivid Strike
eに現れた男の転生者・・・彼の夢は時空管理局へ入り、人々を救う仕事をしたいという夢がある。

管理局に入る前に、自分を強くするため、総合格闘技へと足を踏み入れることになつた・・・そこから始まる物語は誰も知らない・・・

目 次

早速、原作崩壊

いきなり過ぎる展開です！

インターミドルの選手たちに映る光景とは・・・
試合展開が早すぎた

軽度な個人情報流出と重々しいデータ？

やつぱり・・・戦闘民族の血は、伊達じやない！

別世界へ行く悟誠！「・・・だけど、またリリカルなの？」

第6話

32

24

17

10

6

1

早速、原作崩壊

いきなり過ぎる展開です！

転生者として、この世に身を預かり早14年・・・特典としてサイヤ人の力と無限の魔力、そして鍛えれば鍛えるほど強くなつていく身体をもらつて今を生きている・・・しかし、俺は原作に関わるつもりは1mmたりともない。新たな生をもらつたとしても、俺はこの世界でも変わらない。管理局に入り、人々を救う。これが俺の目標であり、夢だ。そんな夢をもつて、今日もジムに行き身体を鍛える。

「悟誠！今日の練習はこれで終わりだ。明日からは自主練にするぞ。DSA Aに参加するからな。」

「ですが、コーチ。男子の部は女子の部が終わつてからですよね？まだいいと思うのですが・・・」

「確かに。だが、女子の部を見て技術を盗むのもいいんじやねえーか？いつもムサツくるしい男どもの試合ばかり見てても、世界チャンプのお前にはあまり刺激にならないと思つてな。」「わかりました。明日は何時集合で？」

「10時にジム集合だ。軽く今の女子達がどういうものなのかを説明してから行くぞ。」

俺は初めて女子の部のDSA Aを観戦しに行く。俺にどういう刺激を与えてくれるか、すごく楽しみはあるが、あまりお粗末すぎるのであれば、有名な選手のみ見て帰るつもりでいた。

「さて！始まりました、DSA A都市予選！本日から女子の部が始まり、終了後男子の部になります。詳細の日程は会場のスクリーンをご覧ください・・・」

今、俺はコーチと共に自身の試合会場でもある、DSA Aの都市予選会場にいる。

「始まりましたね、コーチ。」

「ああ・・・女の子ばかりの試合を見れるなんてサイコーだ！」

「・・・俺しかいない部屋で良かつたですね。他の人から聞いたらアブナイ発言でしたよ。」

「そんなことはねえーよ・・・たぶん。」と告げる。コーチは女の子だけという訳ではないが、可愛い物に目がない。ちなみにコーチ・・・ビスマルク・ダーレトンコーチ。昔のDSA A大会の世界王者だ。だが、彼は俺が出てくるまでコーチをした事もなければ、弟子を取つたこともない、ある意味ルーキーなのだが、俺を見たときに「コイツは俺を超えてくれる。」と思つたらしく、コーチと二人三脚で去年からDSA Aへ殴り込み・・・参加して世界を制したのである。

「しかし、コーチ・・・何故？俺らはVIPルームにいるんです？観客席で見ると思つていたのですが・・・」

「ああ・・・大会運営者が俺らが試合を見に来るという事をリークしたらしく、この部屋に案内されたんだよ・・・嫌だつたか？」

「いえ・・・嫌ではありませんが、どうせなら観客席の前で見たかったなど。」

「そうだな。まあ・・・ご厚意を受け取ろうや。」「はい。そうで「ここで、なんと！女子の部には関係ありませんが、男子の部のワールドチャンピオンである孫・K（カカロット）・悟誠選手があちらで見学をされています。」・・・どういう事つすか？コーチ・・・」

「分からんが、手を振るなりした方がいいと思うぞ。」と言われ、ガラ

ス張りの前に移動し、手を振る。

観客から悲鳴なのか歓喜の声なのか知らないが、耳に来る声を出していた。

「よーしお前ら！今日からDSA Aの都市予選だ。今年から始まつた年齢制限・・・お前らが該当するU—15のDSA Aの大会になつた。ジーク選手やヴィクトーリア選手といった選手たちは出てこないが、充分に強い選手たちは出てくる。気を抜かずにお前らの実力を試合で出し切つてこい！」「「「「ハイ!!」」」

「私や教会の皆さんのがサポートに付くので、安心して試合に臨んでね！」

「さーてみんな氣合が入つたな。よし！それじゃあ、最初の試合は・・・」「ここで、なんと！女子の部には関係ありませんが、男子の部のワールドチャンピオンである孫・K（カカラット）・悟誠選手があちらで見学をされています。」？なんで男子のワールドチャンプがいるんだ？」

青いジャージを着た選手たちがVIPルームの方へと目線を向けると、会場のアナウンス通り、DSA A男子の部でワールドチャンピオンである、男子がいたのである。

「あれが、ジークさんと同じ男子の部のワールドチャンピオンで最近更新されて、ワールドランク1位の人・・・えーと名前なんだっけ？」
「ヴィヴィオさん。の方は孫・K・悟誠選手です。私と同い年で、電光石火の如く男子の部の世界の頂点に立つた選手で、前DSA Aのチャンピオンである、ビスマルク・ダールトンさんがコーチのお方です。」

「良く知ってるな。アイン。・・・そうだな。ヴィヴィオ達も男子の部で孫選手が出る試合を見ようか。いい刺激もらえるし、技術も盗めるかもな。・・・とりあえず、気持ちを切り替えて都市予選に臨むぞー

!」「「「おー!!」」」

チーム・ナカジマの選手達は試合に臨むのだった。

U—15・U—19の都市予選女子の部が終わり、俺はコーチと共にジムへと戻っていた。

「いい刺激になつたか、孫？」

「ハイ。とても刺激になりましたし、許可を取つてですが、自分の技に出来る物がありました。」

「そうか。都市予選が終わつたら、その選手たちに会えるように、段取つておくわ。」

「お願ひしますコーチ。俺は俺の夢を叶える為に、もつと強くなりたいんです。その為にはいろんな物を吸収したいので。」

ジムに到着したと同時に、コーチの携帯端末に連絡がきた。

「はい。ダールトンです……はい。孫選手が了承しないと分かりませんが、DSAの都市予選終了後に連絡する様にしても宜しいでしょうか？……はい。ではそのようにお願いします。失礼します。」「どうしましたか？コーチ。」

「フロンティアジムの方から、試合を頼まれたんだよ。」

「フロンティアジム……ああ、今噂の女子の部U—15のワールドランク1位がいるジムですか……いいですよ。非公式という形であれば、俺は構いません。明日にも連絡を入れて頂いて構いませんよ。」「了解だ。早速明日、連絡しとくわ。」

リンネ・ベルリネット…俺と同じ電光石火の如く現れた選手。どういった思いでこの試合を臨むのか…そして、そのコーチはなぜ？俺に試合を申し込んだのかを見極めるとするか。

都市予選を1位通過し、年齢制限で別クラスになってしまったが、去年戦った選手たちと互いの勝利と本選の健闘を祈念し、打ち上げを行つた。

そして、フロンティアジムから試合の日時、場所の連絡を受けた。フロンティアジムの方、そして、リンネ・ベルリネット選手…お前らが何を考えているかは知らねえーが、こちらの意見を無視したセッティングをしているんだ。覚悟しておけよ…」

悟誠の前には、自身のインテリジェントデバイスである、神龍（シンロン）で映し出したとあるデータを見ていた。

インター・ミドルの選手たちに映る光景とは・・・

フロンティアジムから申し出があつた練習試合当日、俺はとてつもなく気分が悪い。何故かって?それは・・・

「さあ! 本日のメインイベントが始まります!」

とある女子総合格闘技の大会で、俺とベルリネッタ選手が、試合をする事になった。

「コーチ。 結局公式戦みたいな形で試合をする事になりましたね。」

「全くだ。 今では練習試合等を申し込まれた際に、相手の選手達の所属ジムや私用のリングで、行ってきたが・・・電話で非公式でと伝えたのにも関わらず、公式戦大会終了後に試合、今回は初めての女選手から受けた練習試合としても、お前との練習試合を行う際の暗黙のルールがある・・・それを破っているという事を分かつてんのか・・・」「まあ・・・今さら変更しろつと言つても、変えるつもりなんて無さそうだし、お望み通りに試合はしますよ・・・俺は来るものを拒まずの精神で・・・」

「自分の顔がどういう風になつてるか分かつてるか? 悪人みたいな顔をしてるぞ。」

「マジか o_r_z」

コーチと冗談を交えながら世間話をし、試合時間になるまで控え室でウォーミングアップをしていた。

「さあ! フロンティアジム主催の公式大会最終日・・・まさかまさかの、ドリームマッチが今ここで始まります!」

司会の言葉から発せられた、ドリームマッチ・・・当日の会場で貼られていた、ポスターを見て観客は驚いていた。何故かというと、U-15のワールドクラス1位の二人の試合が、大会終了後にあることが、載っていた為である。

「青コーナーからは公式戦全勝中のフロンティア事務所所属選手……リンネ・ベルリネット選手!!!」

会場から沸き上がる声援……リンネは、特に手を振る事もせず、ただリングへと歩いていった。

「準備は大丈夫ですか、孫選手?」

「はい、いつでもOKです……コーチは出来てます?」

「バカ野郎……選手より先に準備を終わらせておくのが、俺の仕事だ。」

「そうでしたね。でわ……行きますか!」

「そして、赤コーナーからはこちらも公式戦全勝の選手……孫・K・悟誠選手!」

リンネ選手が現れた時のように、観客の声援が会場一杯に広がった。俺は観客に手を振りながら、リングへと向かっていったのである。

試合が開始される前に、この会場のVIPルームに今話題の総合格闘技選手達が、集まっていた。

ジーク・エミリア選手、ヴィクトーリア・ダールグリュン選手、ハリー・トライベッカ選手、エルス・タスミン選手のU-19代表選手の3選手、ナカシマジムのU-15代表選手、AINNHALT・ストラトス選手、高町ヴィヴィオ選手、ミウラ・リナルディ選手、リオ・ウエズリー選手、コロナ・テイルミ選手、そして、ナカシマジム会長のノーヴェ・ナカジマ、各選手のサポートであるユミナ・アンクレイヴの計11名がいた。

「ジーク選手、ヴィクトーリア選手にハリー選手、それとエルス選手、今回は私たちをここに呼んで頂きありがとうございます!」ヴィヴィオは4選手に対し、感謝を述べた。

「いいつことよ!こんな面白い試合を見るんだ、これからこの試合に活かせる技術があるかもだろ?」

「ええ・・・わたくし達もリンネ選手は勿論のこと、孫選手なんて私たちも試合を見る機会なんてありませんし。」

「そーやな。うちはどつちかと言えば、孫選手の試合を最初から最後まで、見たことないしなあ。」

「そういうえば、ナカジマ会長。私たちはここに呼ばれたと聞きましたが、誰から呼ばれたのですか?」「リンネ選手からじゃなくて、孫選手から各選手のジムへ招待状を送つてきただよ。」

その情報を知らない選手は驚き、一部の選手達は知つてゐるため、その場では驚かなかつたが、招待状が届いた際には驚いたのである。「しかし、私たちに招待状を送つたのが、リンネ選手ではなく、孫選手からなんて、一体どうしてでしようか?」

「それは良く知らないんだ。ただ、日時の指定と招待状しか入つていなかつたんだ。」

「そ、うなんですか・・・」「「「「「「・・・・・」「「「

「まあ・・・ここで考えてもしやーない。試合が終わつたら、こつちに来るつても書いてあつたし、今は試合を見ようや。」

ジークの一言で、静かになり、試合が行われるリングへと目を向けた。

「両選手、リングイン!審判より今回の試合内容の確認をしております。ちなみにルールですが、3分×5ラウンド、勝敗はK・O又は判定となります。尚、孫選手にはリンネ選手と同じ魔導師ランク陸戦AAとして、リミッターを掛けての試合となります。」

審判より説明を受けた後、俺はコーチの元へと戻り気を高めていた。

「孫、いつも通りの試合をしろ。あまり本気を出すなよ。リミッターを掛けられたとはいえ、ケガをさせたら後味が悪い試合になつてしま

う。」

「はい。試合序盤で見極めたら、速攻でケリをつけますよ。」

「神龍セツトアップ・・・」DSA Aの試合ではドラゴンボールZで出てくる、トランクスの格好でバリアジャケットを展開するが、今回の試合では、基本殴る・蹴るの二つしか攻撃行動として認められていない。よつて、俺は動きやすい格好として孫悟空の胴着で背中には龍の文字を入れた、バリアジャケットを展開した。

リンネ選手もバリアジャケットを展開し、何度も見た事はあるが、戦乙女（ヴァルキリー）を思わせるが、今までの試合を見ると、総合格闘家ではなく、残忍な戦士としか思えない・・・まあ、今はどうでもいいか。その試合、どう料理してやるか、序盤で決めておくか：

「それでは両選手前へ！」審判より声を掛けられた。コーチから「楽しんで来い！」と声を掛けられ、右手で親指を立てて、リングへと向かった。

「今日はよろしく、リンネ選手。」「はい。よろしくお願ひします。」

「それでは！試合開始です!!」試合のゴングと共に、リンネ選手が俺に近づいてきた。

試合展開が早すぎた

試合のゴングと共に、リンネ選手が俺に近づいてきた。さすが、Uー15のワールドランク1位だ。油断も隙も感じられない。流石として言いようがない。だけど、簡単にK・Oされるほど、俺は弱くなっている。

さすが・・・同じUー15ワールドランク1位である、孫選手に隙が見えない。だけど、そんな選手を打ち崩して勝ってきた。今回も同じこと・・・この人に勝つて私はUー15の男女で最強だという事を示す！

ヴィヴィオさん、それとジークさん達は目を釘付けにされていた。勿論、私もである。試合展開はリンネさんのラツシユが孫選手に襲い掛かっている。そんな中、ヴィヴィオさんと会長が「えっ！」と、一緒に声を上げたのである。

「どうかしましたか？会長。ヴィヴィオさん。」

「ええーと、リンネ選手がラツシユを打ち続いているんですけど、孫選手がそんな中でたまに笑つてラツシユを受けているんです。」

「「「ハツ」（。□。；）」「」」

「どういう事だよ、1分以上ラツシユを受けていて、たまに笑つてるつて・・・おかしいだろ。」

「うん、普通ならな。だけど、あの笑つている顔を見ると、そうじやない。まるで、これからどういう展開で戦うかを決めているんだと思う。」

会長から発せられた言葉を聞いた瞬間、私は彼は只者で無い事を改めて理解した瞬間だつた。

さて、ここらで一発喰らつてダウンにでも取られようか……

「リンネ選手のラッシュが止まらない！そのせいか、孫選手は攻撃に転じる事が出来ない！！……おつと！孫選手のガードが崩れた！その隙を見逃さないリンネ選手！孫選手に右アッパーが当たった!!」

ワザとガードを崩して、アッパーをもらつたけど……やっぱり、イテエエエ……

やつぱり、データを確認して良かつたわ。孫選手はナカジマジムの高町選手の様に、打たれ弱いと思っていたのよ。これは次のラウンドでケリを付けられるわね。男女ともにU—15の最強はリンネで決まりね。

おかしい……ジルコーチから言われた通り、打ち込んでいるけど、手ごたえがない……孫選手の身体にはダメージが蓄積しているはずなのに……!!!コーチの言う通りだ。打たれ弱い！ここで、アッパーで決める!!

「孫悟空、ダウン!!」「カウント10・9・8・7・6・5」「孫！立つんだ!!!」

「ハア……ハア……ハア……大丈夫です、やれます。」

「孫選手、立ち上がつた！試合続行です!!!」

そのあと数秒後に、ラウンド終了のゴングが鳴り、各選手はコ一ナーへと戻つていった。

「リンネ、いい試合運びですよ。次のラウンドでK.Oしましちゃう。」「はい……わかりました。」

リンネとリンネのコーチであるジル・ストーラ達は次のラウンドで勝利を確信していた。

「孫……遊びすぎじゃねえーのか？あんなラッシュを受け続けて、更にワザとダウンを取られに行つて……」

「……反省しますよ。今も軽く脳震盪が治つてない状態ですからね。次で終わらせますよ。リンネ選手およびフロンティアジムの方々は、次のラウンドでK.O.出来ると思つていいみたいですから……逆に終わらせてやりますよ。」

「第2ラウンド……開始です！リンネ選手！先程と同じ様にラッシュを打ちに孫選手の元へ近づいています！孫選手！絶体絶命か!!!」

さて……カウンターでも入れるとするか……

リンネのラッシュを受けている孫の顔が不敵な笑みをしていた……

・・・!!!孫選手に笑みが出た！まずい!!!

遅いんだよ……リンネちゃん……ほら！そこが甘いんだよ!!!

「おーっと！孫選手のカウンターがリンネ選手を捉えた!!!リンネ選手、ダウソ!!!」

リンネ選手はダウンを取られたが、直ぐに立ち上がり審判に確認を取つてもらつていた。

どういう事なの！孫選手のカウンター一発でリンネがダウンなんて……

油断してた！孫選手が自分と同じワールドランク1位である事を……あえて、相手に有利な状況を作り出させて、この時を待つていたんだという事を……

さて、コーチの方はともかく……リンネちゃんは、理解したようだ……これからがパーティーの始まりだ!!!

「それでは！試合再開です!!!リンネ選手！ラッシュを止めて、様子を見ています。」

どう攻める……さつきよりも、孫選手の隙が無い!!!様子を見ながら

ら、戦うしか……「リンネ選手……俺から攻めさせてもらうぞ！」……孫選手から感じられる殺気というか……オーラというか……さつきよりも違う！！！

「ハアア……!!!セイヤアアア……!!!」孫選手が雄叫びの様な声を上げた瞬間、孫選手の髪の色が黒髪が金髪へと変わったのである。
「これは俺からアンタら……フロンティアジムの方々への褒美だ……これを公式戦と呼ぶかは定かではないが、俺の試合データの中には無かつた力だ。ありがたいと思えよ……」「……」「ああ……」
喋り方だが、この姿になると、人がかわったかの様に、こうなつちまうんだよ。悪いなあ……」

その後、試合が直ぐに終わつた……先程、リンネ選手が孫選手からダウンを取つたやり方で、一発K.Oを取り、試合を終わらせたのである。その時間はわずか……24秒である。

2ラウンドの試合を見て、VIPルームにいた選手たちは、誰も言葉が出なかつたのである。沈黙がこの部屋を支配していた……しかし、それは来訪者によつて、崩れていつたのである。

リンネ達、フロンティアジムのメンバーは自分たちの控室に戻っていた。

「ごめんなさい。リンネ・・・私が甘かつたせいだわ。」

「いえ・・・私があそこで耐えていたら、まだ勝機があつたんです・・・失礼します。ちょっとお手洗いに行つてきます。」

そう言つて、リンネはトイレへと向かつたのである・・・ドン！という音がリンネの控室から聞こえた。

「私が甘かつたせいで、リンネが負けた・・・つクソ！私のせいだ！！」「ジルさん・・・そんな事は「ああ・・・そうだ。お前のせいで、リンネ選手が負けた。」・・・いきなり何なんですか！あなたは！！」

「・・・ダールトンさん！」「・・・！」・・・何故？こちらにいらっしゃつたんですか？」

「さつきの試合を見てて、俺は心底、リンネ選手をあんな風に育ててしまつた、アンタに呆れたよ・・・何故、アンタがナカジマ会長と張り合つてんのかが、俺には理解できねえ・・・その理由は教えるつもりはない、そんじや、リンネ選手のマネージメントをしつかりしろよ。ジルコーチ殿・・・」

取り残された、ジル達は茫然と立ちすくんでいたのである。

私はまだ弱い・・・力がまだ足りない・・・これじや、守りたい物

も守れない！こんななんじや、また…「大丈夫か？リンネ選手？」…孫選手。」

私の前には、さつきの試合で、私が負けた孫選手がいた。

「…少しばかり、話さないか？」「…いいえ、時間が勿体ないので。」…さつきまで、トイレで吐きながら、大声で泣いていた奴がいうセリフじゃねえよ。」

「聞いていたんですか…」「いや…偶然にもトイレを来たら、聞こえたんだよ。悪かったな。」…

リンネ選手は、顔を赤らめながら口を開いた。

「…分かりました。コーチに時間を作つてもらいますので、待つていてください。」「分かった。場所は、俺の控室へ来てくれ。」

リンネ選手と別れた後、コーチへ先に帰つてもらつてもいいと連絡し、リンネ選手を控室で待つていた。

悟誠から先に帰つてほしいと、連絡が入つた。せつかく、リンネ選手以外と会食させる為に、呼んだ選手たちがいたのだが、まあ、仕方がない。俺だけで対応するか…

会場にあるVIPルームへと俺は、足を運んでいき、ドアを開けた。「皆さん、遅くなつてしまい、申し訳ありません。私が孫選手のコーチを務めております、ビスマルク・ダールトンと申します。」

「私はナカジマジムの会長の、ノーヴェ・ナカジマです。先程の試合は、圧倒的な試合でしたね。」

「あれは無理矢理、試合を終わらせた形になつてしまい、見苦しい物を見せてしまつて、申し訳ありません。」

「いいえ、そんな事はありませんよ。…ですが、教えていただきたい事があります。…孫選手について。」

「…分かりました。ここでお話しするより、食事でもしながら、ご

質問を受けましょう。」

「分かりました・・・皆もその時に質問をする様にしてくれ。」

「「「「分かりました。」」」」

「あのう・・・これだけ質問させてほしいんですけど、孫選手はどこに・・・」

「孫選手はこれから、用事があつて、食事会には参加できませんので、ご了承ください。・・・後ほど、孫選手と顔合わせする機会を作りますので・・・」

「わかりました。」「では、食事会の会場へ向かいましょう。」

ダーレトン一向は、食事会へと向かうのであつた。

軽度な個人情報流出と重々しいデート？

フロンティアジム所属コーチは、ジル・ストーラはダールトンから言われた言葉に、少なからずショックを受けていた所に、リンネが控室へと戻ってきたのである。

「ジルコーチ……これから用事が出来ましたので、ここで失礼します。」「大丈夫？……用事のある所に送つていくけど？」

「はい。歩いて行ける距離なので、大丈夫です。家には遅れて帰ると伝えてあります……では、お先に失礼します。」

「ええ……お疲れさま。気を付けて、家に帰つてね。」

私はリンネに、労いや反省点といった言葉が送る事が出来ないまま、リンネと別れたのである。

さて、リンネちゃんとこれから話し合いをするのだが……どこがいいのか……違法だけどいいか……第97管理外世界であり、前世の故郷である地球へと行きますか！

なんて考えていると、控室のドアをノックする音と共に、「孫選手、リンネです。」が聞こえた。

「どうぞ。リンネ選手……これからどのくらいまで時間ある？」「夕食までには、家に帰りたいと思つています。」

「そつか……じゃあ、あと2時間くらいだな……早速だけど、俺の肩に手を乗せてくれないか？」

「分かりました……ですが、どこへ行くのですか？」

「目的地に着いたら、教えるよ……その前に、他人行儀で話しをするのを、お互い、止めないか？今はプライベートなんだからさ。俺の事は悟誠くんやさん、先輩だけでもいいから、そう呼んでほしい……俺つて私生活では、孫選手とかで呼ばれたくないんだよ。ちなみに俺は、リンネ選手の2つ上だから、リンネちゃんと呼ぶからな！」

「……！わかりました。悟誠さん……ですが、私の呼び方は、ちゃんと付けはいりません。呼び捨てで構いません。」

「分かった、リンネ。それじゃ、目的地へと出発！」

右手の人差し指と中指を合わせ、デコに当て、とある場所へと瞬間移動したのである。

大会会場のVIPルームから、孫選手のコーチである、ダールトン氏の案内の元、首都クラナガンのある店へと、移動したのである。「ノーヴェ・・・こつて確か、クラナガンで人気があり過ぎて、2年先まで予約が埋まってるっていう、高級店だよね。」

「そーだぞ、ヴィヴィオ。私もこの店に来たのは、初めてだ。うちの親父や姉さんたちもこここの予約を取ろうとしたんだけど、早くても、半年後言われたみたいだぞ。」

「そーなんだ。ママたちにも教えておかないと・・・ヴィクトーリア選手はここで、食事をした事があるんですか？」

「いいえ。わたくしも予約はしていますが、今日、ここで食事を取り事が出来て、楽しみで仕方ないわ。」

ほかのメンバーも店に入り、思い思いの話をしていた。ダールトンはこここのオーナーと話をしていた。その内、店員が私たちを奥の部屋へと案内され、席に着き、料理が出てくるまで、ダールトンさんがこの店について話しをしてくれた。内容としては、オーナーとは互いに命の恩人であり、家族の様に親しい付き合いをしている為、この店で食事をする際は、予約は必要ないとのこと。

そんな感じで、話を聞いていると、コース料理が出てきた。その中でも、ミウラさんは、お家がレストラン経営者だから、何か思うことがあつたんだと思う。感激したり、落ち込んだりと、いろんな表情をしていた。私を含めた他のメンバーも、料理が美味しいあまり、無言のまま、黙々と食べていた。

コース料理も最後の一品と知り、孫選手の事について聞こうとした

時、アインハルトさんが、口を開いた。

「ダールトンさん、本日はこの様なお食事会にお誘いして頂き、誠にありがとうございました。」

「構わないよ。これは俺のワガママで、ここに集まつてもらつただけなんだからな・・・さて、何から聞きたいんだ？」

「はい。孫選手の事についてです・・・まず、一つ目ですが、目がいい会長やヴィヴィオさんは、見えたらしいのですが、リンネ選手のラッシュを受けていた際、笑っていたのを見たんですが、なぜ笑っていたんですか？」

「たぶんだが、あいつはリンネ選手のラッシュを受けて、期待通りの選手だつて事なんじやないか・・・これが本当の事かは、本人に聞くしかねえ。」

ダールトンコーチは苦笑いをしながら、「悪いな。」と私たちに謝り、続けて口を開いた。

「・・・二つ目の質問に移る前にだが、俺らは練習試合をする際、さつきの試合で見せた力をTV局や俺が信頼している記者以外によつて、バラされないように、相手側のジムであつたり、私有のリングで練習試合をするつていうのが、相手先が守る暗黙のルールだつた。」

「ノーヴェさん、それは・・・」

「ああ、ダールトンさんの言う通りだ。私も孫選手との練習試合を申し込もうと、総合格闘技の男子選手がいるジムに確認していく中で、絶対にTV局や記者が入り込まない様にする為、ジムや私用のリングで練習試合をする様にと、教えてられたんだ。」

「ですが、別に隠す必要性があるんでしようか・・・ダールトンさん？」
「多分だが、あの試合中で孫選手の姿が変わつた力、あれはな・・・簡単に言うと、ジーク選手のエレミアの神體だったか・・・そんな様な感じの力なんだ。しかも、孫選手の場合は、少し興奮状態になつてしまつて、軽いケガで済めばいいが、一步間違えると、選手生命を終わらせてしまう力なんだ。」

「私（うち）と同じ・・・」

「選手生命を終わらせるつて・・・どういうことなんですか、ダールト

ンコーチ?」

ジークが若干だが動搖しており、選手生命を終わらせるという言葉に、ヴィクター（ヴィクトーリア）が質問した。

「今のジーク選手は、暴走もなく力を制御しているから、俺は一人のコーチとして、安心して見てもられる。だが、孫選手の場合、あいつはある姿になると少し興奮状態になるんだ……リンネ選手には普通の試合をしたみたいだが、俺やあいつに対し、侮辱的な言葉・態度をした選手は、あいつの無限ラツシユの餌食になつて、それを受けた事によつて、そのラツシユどころか、格闘技その物が怖くなつてしまつて、選手生命を終わらせた者たちがいたんだよ。」

ダールトンは何かを思い出す様に、天を仰ぎながら、席にいる選手達へ「これがお前たちが聞いたかつた二つ目の質問だつた、孫がある試合で見せた力は何かの答えだとと思うんだが……」と呟いたのである。

悟誠はリンネと共に、とある店の前へ移動し、扉を開けた。

「いらっしゃいませ……おや、悟誠君じゃないか。」「……あら、悟誠君。お久しぶりね。」と、この店の店長と店員さんである、高町士郎さんと高町桃子さんが俺らを迎えてくれた。

ちなみにこの二人……見た目は20代後半だが、実は40を過ぎたおじさんとおば……「悟誠君？ 士郎さんと恭也の特別訓練を受けたのかしら？」「そのようだ、桃子。恭也は確か、忍ちゃんの所にいるから、呼んだらすぐに入らると思うよ。……素晴らしいお兄さんとお

姉さんが運営している。かなりの人気店である。

「悟誠さん、心が読まれている感じがするのは、気のせいでしょうか？」

「気のせいじやないよ、リンネ。あの二人を敵に回してはいけない存在なんだ……覚えておくといいよ。」

「どうするのかな。悟誠君？ いつでも準備は出来ているけど……」「大変申し訳ありませんでした。本日はお許しください。お願ひします……」

俺の言葉を聞いた二人は、「冗談だよ……だけど、次は無いと思ってね。」と、笑つて答えた、目は笑つてないけど……

今までのやり取りを終え、俺とリンネは士郎さんに案内され、テーブル席へと着いた。互いに士郎さんより渡されたメニューを見て、士郎さんへ注文した。

「……悟誠さん。お話というのは、一体なんでしょうか？」

「この店のうまいケーキが来る前に、話をするか……リンネは、どうして力を求めるんだ？」

「私は強くならなきゃいけない。私が守りたい物を守る為に……」「その“守りたい物”って、客観的に聞くと、かなり広く捉えられてしまうんだけど、何を守りたいんだ？」

「……それは答えられません。初めて会った人になんか、尚更……」「分かった。無理に言わなくていいよ……だけど、俺や俺のコーチから見れば、リンネはただ、いろんな選手達に暴力を振っている様にしか見えない。」

リンネは、俺を睨み付けていた……そんな睨みじや、俺は臆する事はない。まだ、士郎さんや恭也さん、ダールトンコーチの本気の特訓の方が、怖いんでね。

「……リンネは、今まで戦ってきた選手たちが、君と同じ状況の人があいたとして、その人が守ろうとしていた人達も、君が守るのか？」
「……どういうことですか？」

「君が戦った後、相手選手に対しいつもなんて言つてるんだ？」

「そんなのかんけ」「試合、お疲れ様でした……意外に皆さんのが強い

と言つていたのもですから、期待していたんですが、大した事ありませんでしたね”だよ。」

「相手選手とかそのセコンドの人達は、その言葉を聞いてどう思うかな……俺だったら、間違いなく自分が今までやつてきた格闘技 자체を、否定されたって思うね。」

「…………」

その時、土郎さんが注文したケーキ類を持ってきて、俺らの前に置いた。突如、話出したのである。

「ごめんね。勝手に聞いていたけど、僕も悟誠君に、君の試合を見せてもらつた事があるんだ……それを見ただけで僕は思つたよ。君の格闘技は人を殺す。それは、君にとつては、あまりにも不愉快かもしない。だけど、その内……君自身も分かるはずだよ。僕はこの世界の武術を嗜んでいる者からのアドバイスとして、この言葉は受け取つてほしい。」

「……分かりました。心に留めておきます。」

「ありがとうございます。じゃあ、この翠屋のパティシエが作ったケーキを食べて、元気になつて帰つてくれ。」

と、土郎さんは笑顔で去つて行つたが、店員さんとしてはグッジョブ！なんだが、年長者として……この空気をもつと和やかにしてほしいものだ。

俺はリンネにケーキを食べる様に勧め、互いにケーキを食べる気にならなかつたが、リンネがケーキを口へ運んだのを見て、俺は食べ始めた。

すると、「……美味しい！」と言葉が出たのを聞いて、すぐさま「このケーキは全て美味しいからな。」と自慢げに答えた。

そんなこんなで、何とか他愛もない会話をしつつ、ケーキを食べ、お土産のケーキを買い、クラナガンへと帰つたのである。

「悪いね、リンネ。俺のワガママに付き合つてくれて。」

「いえ。美味しいケーキを頂けましたし、お土産まで貰つてしまつて、ありがとうございます。」

「さつきの話だけど、俺の言葉なんて、的を得た物じやないけど、土郎

さんが言つた言葉だけは、頭に入れて格闘技をしていってくれよ。」

「分かりました……今日はありがとうございました。」

リンネと俺は別れた……今日は一日、いろんな事があつたな。やっぱし、俺には人を納得させたりする事は出来ない……俺の拳を相手に与えて、分からせるスタイルだ……それも踏まえ、俺の夢の為にもつと強くななくちゃいけねえ……

拳に力を入れながら、悟誠が見上げる夜空を見上げる……そこには、一番星が綺麗に輝いていた……

やつぱり・・・戦闘民族の血は、伊達じやない！

翠屋に遊びに行つた翌日の目覚めは、今までになく、清々しい目覚めになつた。

だが、こういう時に限つて、何かしら面倒事が起きる・・・何故だろうか？

ジムへ向かう時間になつていた為、着替えを済ませ、翠屋のパーティエ工である桃子さんから貰つた、惣菜パンを食べてから、家を出た。

ジムへ入り、店の人達と挨拶を済ませ、練習場へと入つた時、ダーリトンコーチがこちらを見て直ぐに、笑顔でこちらに向けて走つてきた。正直、もう帰りたい。

「おはようございます、コーチ。」

「おはよう、孫。来て直ぐで悪いが、今日のジムでの練習は無しだ。今日はとある場所に行つて模擬戦をしてもらう。」

「・・・練習スケジュールにありましたつけ？そんな話？」

「・・・悪い、言い忘れていた。」「・・・」

無言の俺に対し、コーチは苦笑い。こうなつてしまつたら何も始まらない為、コーチと共に、模擬戦を行う場所へと向かつたのである。

ウサギの人形から目覚ましのアラームが鳴つた。その音で目を覚めた女の子と、同時に動き出すウサギの人形。今日は学校が休みであり、充分ゆつくりとした朝を過ごせるのだが、今日はそんな気分ではない。自分と同じ格闘技選手であり、憧れの選手が、自分の母親と模擬戦を行うのだから。

「おはよう。なのはママー・フェイトイママー！」

「おはよう、ヴィヴィオ。よく寝れた?」

「うん、大丈夫だよ。フェイトママ!」

「心配してるんだよ、ヴィヴィオ? 今日が楽しみって、昨日の夜から興奮してたから。」

「えへへ。だつて、なのはママと孫選手の模擬戦を見れるなんて、思いもしなかつたんだもん。」

今日は孫選手となのはママの模擬戦闘訓練があるので。私はお互の実力を知つているからこそ、ワクワクが止まらないのだ。

もちろん、仲の良いメンバーはもちろんの事、フロンティアジムのリンネ選手や、この前知り合つた、ジーク選手達も見に来るというのだ。早く、模擬選を見たい・・・どんな戦いになるか、気になつて仕方がない。

「ヴィヴィオー! そろそろ時間だから、行くよ。」

「あわわわ! 今、直ぐ準備するから〜!!」

「ここって、空戦魔導師の教導訓練所ですよね。」

「そーだぞ。今日はここで模擬戦をやる。孫は、ウォーミングアップしてていいぞ。」

「了解です。では、模擬戦が始まる30分前くらいに連絡ください。俺は、訓練所廻りでウォーミングアップを始めた。すると、最近見慣れた格好をした、一団が来たのである。

「お久しぶりです。フロンティアジムの皆さん。今日はもしかして、模擬戦を見に来たんですか?」

「その通りですよ。孫選手。今日は、模擬戦を見て、あなたの技術を盗みにきました。」

「・・・本人を目の前にして、言う事ですか? リンネ選手。」

俺はリンネちゃんが、先日の一件でどう思つたのかは分からない

が、以前よりかは、結構、フレンド的というか話しやすい相手になつたつていう事は、感じ取れる。

「孫選手。ダールトンコーチはどこにいらっしゃいます？挨拶をしたいのですが・・・」

「俺の控え室にいますよ。ジルコーチ・・・どうしたんですか？顔が強張つてますよ？」

「ええ・・・いろいろとあつて、緊張しているんです。気にして頂いてありがとうございます。では、私たちは行きます。今日の模擬戦、頑張ってくださいね。」

ジルコーチ率いるフロンティアジムの一団は、訓練所内へと入つて行つた。

ここにいると、知り合いや俺を知つている人達に声を掛けられると思い、室内のトレーニングルームへと向かつた。

「いろいろお忙しい高町教導官に、今日という時間を作つて頂いて、誠に感謝いたします。」

「いえいえ、それはお互い様です。ダールトンさん。私も今日という日を楽しみに待つていましたから。」

悟誠の控室には、今日の模擬戦の相手である、高町なのはとダールトンがいた。

「孫選手はどこにいらっしゃるんですか。模擬戦前にお話ししたいと思つていたのですが・・・」

「悪いね、高町教導官。今、ウォーミングアップしに行つてるから、ここにはいないんですよ。」

「そうでしたか。では、模擬戦開始前にでも挨拶します。では、後程。」
なのはは、部下と共に控え室を出た・・・10分も経たない内に、悟誠が戻ってきたのである。

「どうした、孫？もう終わつたのか？」

「ええ、終わりましたよ。あまり長い時間やつても、疲労するだけなので。」

「タイミングが悪かつたなあー。さつき、今日の模擬戦相手が、挨拶に来てたんだが、模擬戦開始前に挨拶するって言つてたぞ。」

「了解です。ちなみに後何分くらいで、始まるんですか？」

「後、30分後に始まる。柔軟体操でもしくんだ。」

相手が誰だかは分からんが、全力を持つて戦うだけだ・・・俺の夢に向かつて。

今、訓練所の観客席には、私、高町ヴィヴィオとコロナやリオ、アインハルトさんや教会メンバー、ジークさんや、ヴィクターさん、ハリーさんといった方々の他に、U—15のワールドチャンプである、リンネ選手達がいた。

「ジルコーチ、お久しぶり。今日はこの模擬戦を見に来たの？」

「お久しぶり、ナカジマ会長。そうなんです、リンネがこの模擬戦を見たいというので、全員で来ました。」

「初めまして。リンネ・ベルリネットです。今日は、一選手として孫選手の模擬戦を見にきました。」

「初めまして。ナカジマジムの会長をやつてるノーヴェ・ナカジマですよ。宜しくね。」

ノーヴェとリンネ選手達の挨拶が終わった瞬間、アナウンスが聞こ

えてきた。

「これより、模擬戦を開始いたします。本日は、1試合のみの模擬戦ですが、管理局員の皆さんはもちろんの事、観客席にいらっしゃる方も、この模擬戦が有意義な時間になる事を・・・これより、時空管理局所属、高町なのは教導官と孫・K・悟誠さんとの模擬戦を開始します！」

これから始まる試合に、ワクワクせずにはいられなかつた。

「初めまして。私は、高町なのはつて言います。今日はよろしくね、孫選手。」

「こちらこそ初めまして。孫・K・悟誠つて言います。高町教導官、本日はよろしくお願ひします。」

「なのはさんでいいよ。」

「では俺も、悟誠君でも、呼び捨てでも構いません。」

お互に模擬戦が開始されるのを、自己紹介した後は、静かに待つていた。

R e d d y . . . G o !!!

「行くぞ！ 神龍、セットアップ！！」

「行くよ。レイジングハート、セットアップ！！」

互いに、模擬戦開始後に、バリアジャケット（BJ）を装着した。

俺は、一気に近距離戦を持つしていくのは止めて、距離をとつたのである。

一方、B J姿になつて、距離を取つた悟誠に向けアクセルシユーターを撃つ・・・悟誠は避けずにそれを全て、弾き返したのである。『ワールドチャンプの格闘技選手だけあるね。結構、これを撃つと訓練生は、嫌がるし、弾き返されるなんて思いもよらなかつたよ。』なのははとある思惑を胸に秘めて、アクセルシユーターを撃ち続けていたのであつた。

『おかしい・・中・遠距離タイプの魔導師が、こんな攻撃しかしていないなんてありえない・・うん？魔力を散布されているこのフィールドで考えられるのは、俺が接近戦を持ちかけた時に、何かしらやろうとしている。』

悟誠はなのはの攻撃パターンに違和感を感じたのである。

『だが、俺が格闘技選手だからと言って、遠距離攻撃が出来ない訳じゃない・・・大技を撃つというのであれば、俺もそれに合わせて準備をするか・・・神龍、武装変化。』

なのはは、目の前にいる悟誠が何かしら、企んでいる事を察した。このままでは、先にやられてしまう恐れがある。なら、強制的に魔法散布を十分にすればいい！

「孫選手、ここで決めるよ。デイバイーン・・・バスター！」

なのはの砲撃が悟誠を襲う・・・だが、しかしそんな状況に於かれている悟誠は、笑っていたのだ。

「・・・フェイテッド・サークル！」

悟誠が回ると同時に赤い球体が出てきたのである。それとなのはの攻撃が当たり、爆発が起きたのである・・・なのはは、自分の全力

全開の技であるスターライト・ブレイカーの準備をしていた。

悟誠も簡単に倒される訳にはいかない為、自身も爆発が起きた中で、自分が撃てる最大の技を撃つ準備をしていた。

「・・・チャージ完了！行くよ、レイジングハート。これが全力全開のスターライト・ブレイカー!!!」

悟誠にピンクの巨大な砲撃が襲う。しかし・・・「スターダスト・ブレイカー!!!」

悟誠から撃たれたのも、スターライト・ブレイカーと同様くらいの大きさで白銀の砲撃が撃たれたのである。

「高町教導官！訓練所を壊してしまってなんて・・・これは模擬戦なんですよ!!!」

「孫、お前もだ。俺はてっきり、格闘技で攻めていくもんだと思つていたが・・・これは酷すぎるぞ!!!」

「すいません（でした）」

お互いの放ったブレイカーにより、訓練所が破損してしまい、模擬戦は中止。観客には被害は及ばなかつた事が、不幸中の幸いだつたと・・・その場にいた管理局員は口を揃えて言つた。

コーチに「今日の感想は？」と聞かれたときに、本人のいる目の前で・・・

「俺もそりだが、やはり、あの人も戦闘民族高町家の一人なんだなあ・・・」

悟誠の独り言を聞いてしまった、戦闘民族の一人が「O・H A・N A・S H I しようか・・・」と、悟誠を追いかけ、互いの親しい人達が止めるまで、戦闘民族サイヤ人が戦闘民族高町家に追いかけられていた。

別世界へ行く悟誠！「・・・だけど、またリリカルなの？」

第6話

高町なのはさんと模擬戦を行つた帰り道、俺はグラナガンから姿を消した・・・

そこは、真っ白な世界で死んだらそこへ行きたいと思つても、本当に行けるかわからぬ世界・・・そして、ここは俺とつて懐かしい場所もある。

「・・・久しぶりだ、ここへ來るのも。俺はまさか死んだのか？」
「いやいや、君はまだ死んでおらんよ・・・悟誠君。」

俺は声が聞こえた方へ向くと、俺を転生させた神様がいた。（自称）全知全能の神らしい。

「自称ではない。それは君が一番良く知つてるでしょ!?」

「・・・そうだった。この神様、心が読めるんだつた・・・で、話が変わりますけど、何故、俺はここにいるんです？」

「・・・平行世界というか、私以外の神が管理している『リリカルなのは』の世界に、踏み台転生者が欲しいらしいんだ。」
「・・・俺がいた世界に戻してください。」

「待つてくれ！最後まで話を聞いてほしい!!!」

「・・・分かりました。最後まで聞きましょう。」

「君は本当に優しい。では、話を戻すけど、その世界にはオリ主となる者と悟誠君にやつてもらいたい踏み台転生者がいたんだが、オリ主が踏み台君を殺してしまったんだよ。」

「正当防衛とかじやないんですか？それだったら、問題ないとと思うんですけど？」

神様は真剣な表情から目を瞑り、顔を左右へ振った。

「残念だけど、違うみたいだ。その世界を管理している神がこつちに来れないらしく、その時の映像を寄越してくれたんだ。これを見れば・・・理解したくもない真実が見れるよ。」

俺は静かに首を縦に振り、神様が映し出した物を見るのであつた。

とある公園で、男の子二人が向かい合っていた。

「どうした、俺をこんな所に呼んで？」

「・・・」

「ダンマリかよ。俺は明日、嫁たちとどういう風に過ごすか考えなければならん。」

「・・・」

「用がないのなら呼ぶんじゃねえ。ほんとう!!!!」

「・・・用は済んだ。お前の様な奴がいるから、俺の女たちが大変な目に合う。さつきと消える。」

「てめえ・・・丑島。こんなことしていいと思うのかよお・・・」「ああ・・・テメエみたいな奴がいると、俺の計画が狂つちまう・・・だから、お前を殺して、この物語を俺、一人で動かす。じゃあな、踏み台野郎。」

「・・・あのクソ野郎が、本当にオリ主なのか？こいつを転生させた神様は、どういう基準で選んだんだよ？」

「もちろん聞いたさ。そしたら、『もしかしたら、この人だつたらと思つて』という感じたらしいぞ。」

「人を見る目が無さすぎだろ。・・・俺も死人だけど、その神も心は読めるんだろ？」

「転生する際は、テンプレオリ主だつたんだけどね・・・踏み台転生者と生活していく中で、原作キャラを自分のモノにしたいという、欲が出てきたからだらうね。」

「ワロタ。新しい命と力を貰つたのにも関わらず、人殺しかよ・・・俺はどうすればいいんだ？」

「あちらの世界へと行き、オリ主と呼ばれていた人殺し（転生者）を、殺してきてほしい。」

「・・・覚悟をください。人殺しをする覚悟を。」

「すまん・・・急に殺して来いというのも、無理な話をしてしまつたな。」

「……これから、とある世界へとお主を転生させる。これは、覚悟を持つてもらう事と、さらにお主を強くさせる為に、転生させる。」「別な世界へと転生させられるとすると……今までいた世界と、クソ野郎がいる世界の時間が進むのでは？」

「……お主がいた世界は、時間を止める事が可能だ。あちらの世界は、あちらの神に止めてもらうよ。」

「了解……で、俺はどこの世界へと行き、特典がありなしと、どういう立場で転生されるかを知りたい。」

「……転生先是『GATE 自衛隊 彼の地にて、斯く戦えり』という世界だ。」

「タイトルから推測すると、自衛隊がメインなのか？」

「大体ではあるが合っているよ。だけど、ストーリーや世界観はあって行つてから、知る方がいいよ。覚悟を持つたためにも。」

「分かった。だと、特典はどーなるんだ？俺はサイヤ人の能力を持っている状態なんだが……」

「そこは変えるつもりはないよ。いろいろな身体の補助を付ける事にはなるよ。例えば、『Fate』のサーヴァントの能力とかは付けられない。あれは、これから行く世界ではとてつもなく、危ないからね。」

「……まあ、適当に能力とか付けて貰えれば、俺はいいや。だけど、超サイヤ人になつたりとかは、最初からじやなくて、途中で出来るようにしてほしい。」

「了解……よし！君にはこれから行つてもらうよ。頑張ってくれ。」

「ああ・・・ありがとうな、神様。」

悟誠の周りが明るくなつたと思えば、もういなくなつていたのであつた。

とある世界の日本・・・神奈川県横須賀にある総合自衛隊高等学校と呼ばれる、学校があつた。

その学校では、陸・空・海の自衛隊員の卵（自衛隊員候補）を育てる学校であり、学校を卒業すると、各地の自衛隊基地へ配属となる。一般には、こう説明をしているが、説明していない部分がある。

そう・・・それは、特殊作戦群、通称“S”と呼ばれる部隊へと、入隊させる為だけの、学科が存在した。それは、“S学科”である。そのままではあるが、他の学科とは違い、人数は入学時は、最大で10人まであり、1年の1学期を終える頃には、5人以下になつている学科である。

悟誠は、神誠悟（じんせいご）と名乗り、その学科へ踏み入れたの

であつた。